

ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海

－ 記録と記憶の継承と創造 －

ごあいさつ

長崎大学熱帯医学研究所附属の熱帯医学ミュージアムは、2008年4月の開設以来、寄生虫・細菌・ウイルスなどを原因とする熱帯感染症やNTDs（顧みられない熱帯病）の病原体の構造、感染経路、媒介動物の生態をパネル・標本・動画で解説し、ワクチン・診断法・制圧戦略の成果を広く伝えてきました。

第二次世界大戦後、日本は栄養条件や衛生環境の改善、予防接種の普及などを通じて結核やさまざまな風土病を制圧し、「長寿社会」を実現しました。一方、途上国では、依然としてさまざまな感染症が蔓延し、熱帯医学研究所はいくつかの海外拠点を通じて感染症の流行状況の調査や対策人材の育成に取り組んできました。

こうした中で、2020年、新型コロナウイルスが日本を襲い、政治・経済・社会に深刻な混乱をもたらしました。流行からおよそ5年目を迎えた現在、変異株の出現や局地的な流行は続いているものの、人々の危機感や当時の一次資料・証言は急速に失われつつあります。

そこで、熱帯医学ミュージアムは、展示対象を熱帯感染症にとどめず、新型コロナ関連の資料を系統的に収集することにしました。今回、特にクラスターの発生で日本への感染を印象づけ、社会を震撼させたダイヤモンド・プリンセス号の乗客から提供された記録を企画展で公開し、隔離生活中の人々の心理、船内の医療体制、メディアへの対応などを紹介することにしました。

本企画は「科学データ」と「社会・文化の記憶」の双方を継承し、将来のパンデミック対策に役立てることを目的とする。

2025年2月 熱帯医学ミュージアム

新型コロナウイルス感染症のパンデミック

2019年～2023年、COVID-19が世界的なパンデミックとなりました。

タイムライン

2020.3.2 全国一斉の休校開始

2020.3.11 WHOによるパンデミック宣言

2020.4.7 緊急事態宣言（東京）

2020.4.16 宣言、全国に拡大

その後、何度か緊急事態宣言が出され、また、ワクチン接種の進展などによって感染はしだいに収束

2023.5.8 感染症法上の種別を季節性インフルエンザ並みに変更

感染・死亡状況

世界: 感染約7億人、死亡約700万人

日本: 感染約3,400万人、死亡約7.5万人

回復しても、後遺症に悩む方も少なくない



台湾に定泊中のダイヤモンド・プリンセス号

報告書・検証の動き

UK COVID-19 Inquiry (2022～)

各国政府報告書

（デンマーク、オーストラリア、台湾等）

長崎大学記録集の『赤』と『青』



英国検証委員会HPのホームページ

ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海

DP号の船体・航路概要とCOVID-19感染後の横浜での隔離経緯、資料と写真解説

長崎で建造されたDP号

建造：三菱重工長崎造船所（2004年竣工）

全長：290m、高さ：54m、総重量：11.6万トン

最大収容人数：約2,700人（乗客）、乗員：約1,100人

就航：主に日本とアジア周遊コース

感染拡大の経緯

1月20日：香港・ベトナム・台湾等を巡航

2月3日：横浜港に帰港。感染者を確認

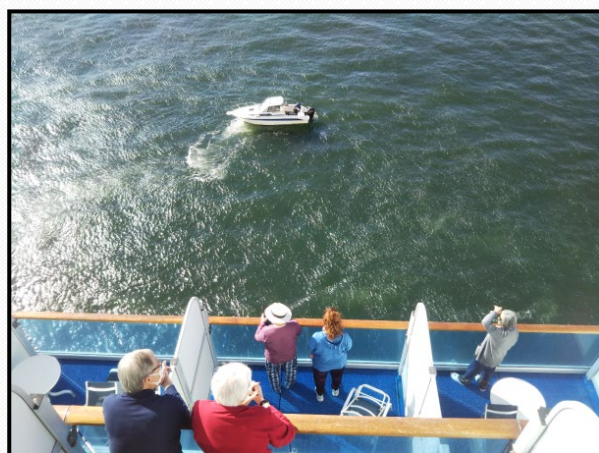
船内感染者：計2,666人中、陽性は712人

検疫と対応

2月3日 PCR検査で陽性者確認

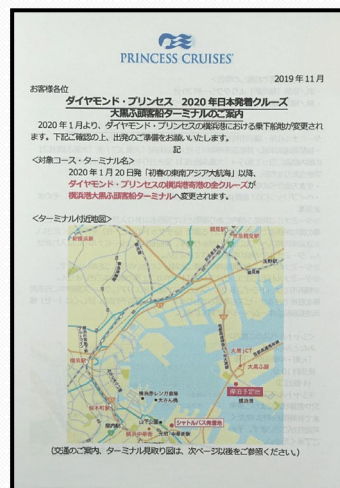
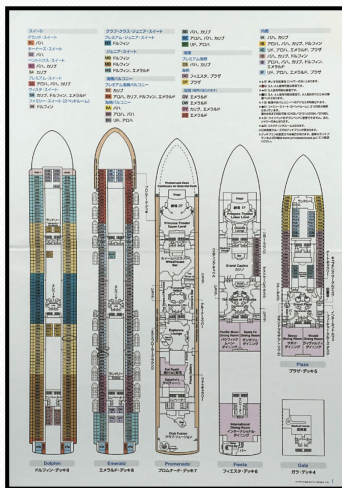
各国の乗客：日本人1,281人、

厚労省・自衛隊等が対応、乗客は船内隔離状態へ



船室のデッキから海を眺める乗客たち
(2月9日撮影)

主な資料・図面



検疫と治療のはざま

混乱したDP号への検疫・治療体制、乗客ストレス、チャーター機による帰国

混迷の背景

クルーズ船には日本の法律が及ばず、感染症対応の明確な規則がなかった。
DP号では最終的に769人が陽性と確認。船内の医師は2人だけで医務室は機能不全に。

高まるストレス

乗客は長期間の隔離によって強いストレスを受けた。
医療搬送されたのは新型コロナ陽性者だけではない。
乗客の約3分の1が70代以上、80代超も200人超。
ストレス由来の心筋梗塞や脳梗塞の発症もあり、受け入れ病院の確保が必要に。

検疫と医療の相克

検疫継続か、医療搬送か、という対応方針の対立（ジレンマ）が表面化。
船内隔離による感染拡大防止に疑問の声も。
水際対策（入国制限等）にも国内外から批判。
New York Times紙：「中国以外で最も感染者が多い場所」と報道。

チャーター機による帰国

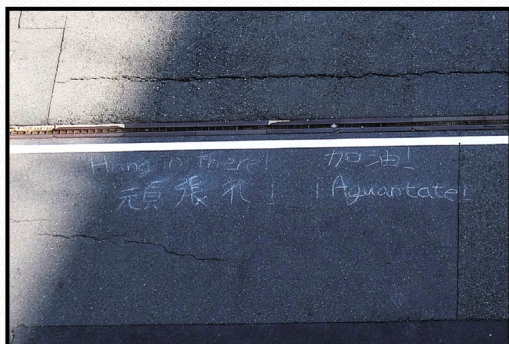
米国政府は2月17日、328人を下船させ、帰国
その他のチャーター派遣国（計13か国・地域）
韓国、イスラエル、オーストラリア、
香港、カナダ、台湾、イタリア/EU、英国、
ロシア、フィリピン、インド、インドネシア
乗客904人・乗員671人、計1,575人が帰国。



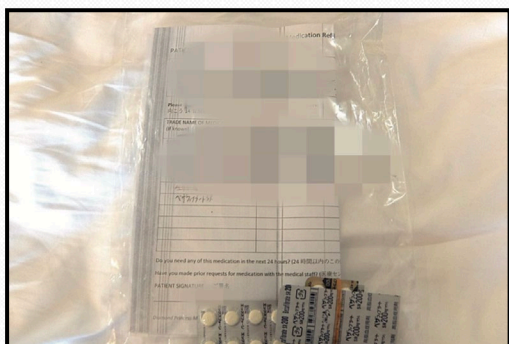
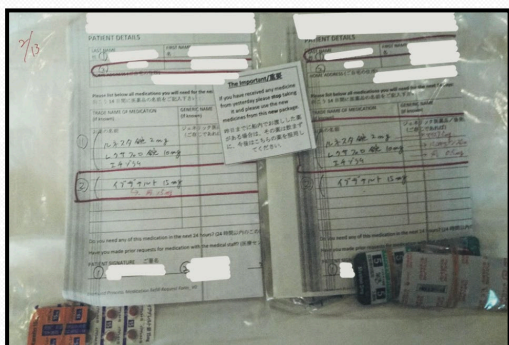
夜間にも行われたチャーター機での
帰国のための下船の様子
(2月17日)

ダイヤモンド・プリンセス号の日常

乗客は隔離された空間の中で生活し、乗員も感染リスクのある業務に追われていた。2月19日から順次下船が始まり、3月1日に全員が下船したが、13人が亡くなった。下船後も差別や中傷が続く一方で、横浜では応援の声も寄せられた。



岸壁に書かれたさまざまな言語
による激励の言葉



医薬品のオーダー表と処方された薬の一例



クルーズカード



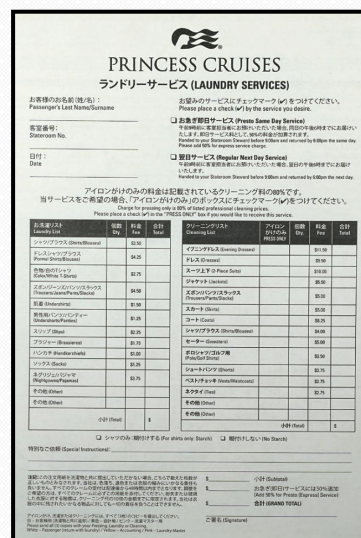
乗員による配膳



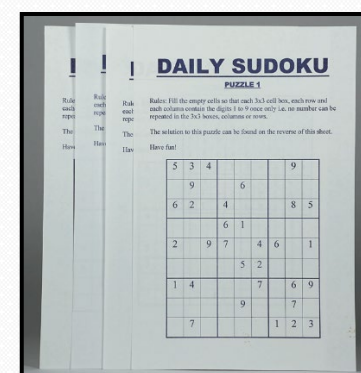
朝食の記録



ランドリー・サービスの
カード

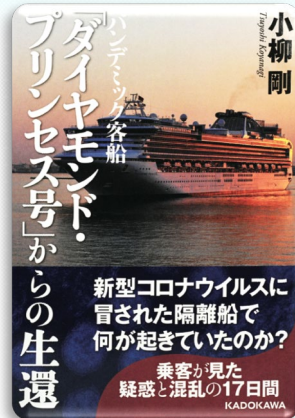


ランドリー・サービスの
のオーダー表

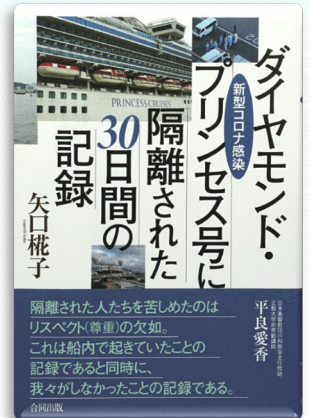


記録と記憶

DP号では、乗客代表の千田さんが政府の隔離対策に対し、「感染を防げず健康な人のリスクを高めた」と批判した。薬の確保や医療体制にも問題があり、乗客からは不満の声が多く上がった。こうした体験は回顧録にもまとめられ、隔離の効果に疑問を持つ人も多い。



小柳剛著書の表紙



矢口栂子著書の表紙

DP号のレッスン

DP号での新型コロナ対応では、関係者と乗客の認識にズレがあった。厚労省は船長アルマ氏の協力を評価し、対応が円滑だったとする一方で、乗客の一部は責任回避的な姿勢と受け取った。

この経験は、その後長崎港で感染が発生したコスタ・アトランチカ号の対応に活かされ、全員が回復した。DP号の教訓として、感染拡大時には全員下船が理想とされるが、当時は受け入れ施設がなく、実現は困難だった。

今後は法制度やインフラの整備が不可欠とされている。



コスタ・アトランチカ号
(長崎大学広報戦略本部提供)



蛍光LAMP法の機器
(安田二郎教授提供)

(解説)

新型コロナのパンデミックをめぐる記録と記憶の継承と創造

飯島渉

ダイヤモンド・プリンセス号の衝撃

新型コロナの記録

博物館の取り組み

2020年から全国の博物館が新型コロナ関連資料を収集・展示。北海道浦幌町立博物館では町民からマスク等を集め、吹田市立博物館は自粛ビラなどを集めて「新型コロナと生きる社会」のミニ展示＆巡回展を実施。

国立歴史民俗博物館はこれらの資料に加え与論島の事例も展示する企画展を開催し、内藤記念くすり博物館は「ウイルスの世界一発見から2021年新型コロナウイルス」展でウイルス史を紹介した。

国立歴史民俗博物館での展示解説の様子
(2024年11月29日 筆者撮影)



記録を残すための試み



大阪大学学園祭の展示
(2023年11月5日 筆者撮影)



台湾・国立成功大学でのワークショップ
「大疫考現学」の様子 (2023年9月2日 筆者撮影)



記録と記憶の継承と創造

企画展 2025.2 - 2025.8

長崎大学熱帯医学研究所
附属熱帯医学ミュージアム

ダイヤモンド・ プリンセス号 の長い航海

— 記録と記憶の継承と創造 —

COVID-19

COVID-19

